

「ピンカス・ズーカーマン再び」

宮崎県立芸術劇場理事長 青木 賢児

アイザック・スターンは、宮崎国際音楽祭に関わった6年の間に、多くの世界的演奏者を同道して宮崎に紹介してくれました。その中の一人にスターンが「ピンキー」の愛称で呼ぶ、ヴァイオリニストとのピンカス・ズーカーマンがいます。

第6回音楽祭に現れたズーカーマンは、バッハの「ヴァイオリン協奏曲第2番」、モーツァルトの「ヴァイオリン協奏曲第5番」、ブラームスの「ピアノ四重奏曲第1番」そしてシューベルトの「ピアノ五重奏曲『ます』」と、連日ステージに立って宮崎の聴衆の心を驚掴みにしてしまいました。

ズーカーマンはパールマンや五嶋みどりなどととともに、スターンが見出した天才ヴァイオリニストの一人で、イスラエルからニューヨークに引き取った頃の14才のズーカーマンについて、「やんちゃ坊主だったが、その才能たるや信じられないほど凄かった！」と述べています。

宮崎国際音楽祭に参加したズーカーマンは、音楽祭ばかりでなくホールと合奏団をすっかり気に入ってくれて、帰りには右のポケットにホールを、左のポケットにはオーケストラを入れて帰りたいと言っていました。そして、建設会社に掛け合っただけでホールの英文の設計図を手に入れましたが、それを聞いたスターンに「カナダにはそんなお金はありゃしないさ」とひやかされていました。

その後、ズーカーマンに招待されて、オタワの「カナダ国立国際芸術センター」を訪ねる機会がありましたが、首都とはいえニューヨークからは小型機の便しかない静かな田園都市といった感じです。スターンはかねてからズーカーマンのことを「世界的な演奏家であり指揮者であるだけではなく、非常に優れた音楽指導者だ」と評していました。オタワの芸術センターの教室には世界中から若者たちが集まり、最高学府のプロフェッサーという感じで、商業主義的音楽界からは一歩距離を置く姿勢を強く印象づけられたものでした。

スターン急逝後、彼は音楽監督のピンチヒッターとして第8回宮崎国際音楽祭に参加してくれ、再び多彩な演奏で聴衆を魅了してくれました。

そして今回、大震災の余波を受けて立ち往生する宮崎国際音楽祭に、ピンカス・ズーカーマンがまたまた手をさしのべてくれ、5月15日（日）「ズーカーマンのタベ」で、ヴァイオリン、ヴィオラ、指揮と多彩な音楽の世界を展開してくれることになりました。

スターン亡き後、ヴァイオリン界の頂点に立つズーカーマンのコンサートが、今このときに宮崎で実現することに偶然以上のものを感じるのは私だけでしょうか。恐怖ばかりが伝えられる今の日本をあえて訪れてくれる姿には、音楽の力を信じる真の芸術家の心を見る思いがしてなりません。

ズーカーマンが奏でる「心の音楽」を、一人でも多くの方が鑑賞して下さいますように、お待ち申し上げています。